様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：８４４３３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１８８

研究課題名（和文）中国南北朝-唐時代における道教礼拝像の地域性研究:河東(山西省西南部)を中心に

研究課題名（英文）A regional study of Taoist images: with a focus on HeDong (south-west Shanxi Province), from the Northern and Southern Dynasties to the Tang Dynasty

研究代表者
齋藤　龍一（Saito, Ryuichi）

地方独立行政法人大阪市博物館機構（大阪市立美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪・大阪市立美術館・主任学芸員

研究者番号：７０５７３３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　道教像の定型化はこれまで先学が指摘してきた北周ではなく、数十年遡る西魏であることを明らかにした。凭几を伴う維摩像と道教像を比較すると、維摩像で北魏（6世紀初頭）そして道教像では西魏と、近接する時期に相次いで凭几が表されるようになったことがわかる。つまり凭几を伴う道教像は、山西における図像的にやや崩れた維摩像が、同じく山西・河東における道教像の制作に際し引用され成立するに至ったと考えられる。
　また河東と黄河対岸の潼関で出土した仏像･道教像の検討を通じ、隣接する地域間における「像の移動」はあったもの、それを要因とする造像様式の影響関係はなかったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　道教像に関する美術史的なアプローチは、いまだ萌芽期の域を出ていないのが実情である。そのため、道教像の年代的変遷については、一定研究成果の積み重ねがあるものの、中国各地における道教像の様式とその地域間での相違、すなわち地域性についてはあまり論じられていない。
　本研究では、長安(陝西省西安市)と洛陽(河南省洛陽市)の間に位置する河東(山西省西南部)における道教像の展開と、同地域の道教像が他地域へ影響を与えた事象を検証したが、これにより「道教像の地域性」という重要なテーマの解明に大きく貢献することができると考えている。さらに、「道教美術」という美術史における研究領域の確立に資するものと推測される。

研究成果の概要（英文）：The stylization of Taoist statues revealed that it was not Northern Zhou, which had been pointed out by previous scholars, but Western Wei, which dates back several decades. A comparison of the Vimala statue accompanied by a Pengji and the Taoist statue shows that a Pengji came to be represented in the Northern Wei (early sixth century) in the Vimala statue and in the Western Wei in the Taoist statue, one after the other in the period of proximity. In other words, it is considered that the statue of Taoism accompanied by a Pengji was established when the iconographically slightly collapsed statue of Vimala in Shanxi was quoted in the production of the statue of Taoism in Hedong.
In addition, through the examination of Buddha statues and Taoist statues excavated at Hedong and Dongguan,Shaanxi on the opposite sides of the Yellow Rivers, it was clarified that there was' movement of statues' between adjacent areas, but there was no influence of the style of statue formation as a factor.

研究分野：中国仏教・道教美術史

キーワード：中国　仏教　道教　中国美術　仏教美術　道教美術　美術史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

仏像をはじめとする仏教美術については広範かつ詳細な研究の積み重ねがあるのに対して、道教像に関する研究はかなり状況が異なっている。その最たる理由は、仏像については山西・大同雲岡石窟や河南・洛陽龍門石窟、甘粛・敦煌莫高窟をはじめとして大規模あるいは国家的な造営による石窟寺院が今なお存在し多くの像が遺るが、それに比して道教像の現存数が圧倒的に少ないことにある。また紀年銘を有し基準作例となりうる道教像は、その多くが 20 世紀初頭にアメリカや日本をはじめとする中国国外にもたらされ、出土地・原所在地あるいは伝来に関する情報が失われていることも大きい。

さらには近代における中国彫刻研究の先駆者である大村西崖ですら、その著書『支那美術史彫塑篇』において唐時代の道教像について論じるなかで、「像は皆その形式既に全く一定して、作風はたゞ仏像を摸仿し、その技術は到底仏像の儔に非ず。（中略）道像は終に彫塑史上深く論ずるの価値あるを認めざること、猶我が国の神像の如しと謂ふべし。」と評したように、道教像は仏像に比べそれほど論ずるに値しないと捉えられ、いまだ中国彫刻史研究において、道教像はざっくりと一括りにされている感は否めない。

２．研究の目的

このような状況のなかで検証すべき大きな問題のひとつが、道教像は本当に時代的な変化や地域的な変化が乏しいのかという点である。言うまでもなく仏教はインドで生まれ、中国そして日本へと伝播するなかでその教えのみならず仏像のすがたも大きく変化を遂げている。一方、道教は中国で生まれたもので、仏像に比べ変化する要因が少ないことは明らかである。とはいえ道教像の詳細に検討するなかで、先学による指摘は妥当ではないと考えるにいたっており、道教像のおける地域性のあり方について新知見を得ることが大きな研究の目的である。

特に、大都市･西安(陝西・西安)と洛陽(河南・洛陽)の中間に所在する交通の要衝、河東地域(山西西南部)を主たる研究対象とし、道教が仏教と競いながら体系化してゆく南北朝–唐時代(5-10 世紀)における道教像の地域性の出現と展開の過程を、同地域の仏像や他地域の道教像との詳細な比較検討を踏まえながら解明することを目指している。

３．研究の方法

本研究の前提となる諸研究で得た情報を元に、関連する道教像、仏像についての画像・情報を網羅的に収集すると共に、作品の調査・撮影を実施し、像の細部にみられる特徴を比較検討する。

４．研究成果

（1）道教像の定型化と河東

道教像研究の先学を代表する大村西崖そして松原三郎が、南北朝時代における道教像の代表例として示したのは、北周・天和 3 年（568）銘　道教三尊像（東京藝術大学大学美術館）である。主尊像は大きな冠を被り右手で麈尾を執り、結跏趺坐するような姿勢で坐りその腹前に凭几が表されている。凭几とは、「もたれるつくえ」という意味の調度のことで、具体的には腰を支えるように天板が半円状に湾曲し、脚が三本のものを指している。本像は出土地ないし伝来地は不詳だが、大村西崖は「この像式は即ち周代に剏めたるものなること明にして、實に道教像の典型を定めたるもの」、そして松原三郎は「北周も半ば頃、いわゆる道

教像として隋・唐に先駆するものが完成した」とし、本像をもって道教像は北周に定型化をみたと述べている。

このような言説について再検討するべく、特に大きな特徴である凭几の有無を中心に、多くの道教像について詳細に観察した。その結果、河東（山西西南部）の芮城に伝来する西魏・大統 14 年（548）銘道教造像碑（山西・芮城永楽宮）の正面・背面各主尊像が凭几を伴っていることを確認した。本像は蔡氏造像碑、老子祠造像などと称される大型碑で、碑上部の大きな螭首の中央下に屋形龕が開かれている。龕内の主尊像は大きな冠を被り四脚座に右足先を見せて坐り、台座の前方に衣を幅広に垂下させる点は如来坐像の懸裳に準じている。注目すべきは右足先の上に小さく露出するＴ字形で、両手をこれに添えていることから凭几の中央部と考えられる。また碑背面上部の主尊坐像も腹前に凭几と思われるＴ字形の突起を確認することができる。同像も大きな冠を被り、左手は凭几に添え、右手に麈尾を執っており、道教像の基本的なアイテムである麈尾、冠、凭几をすべて備えている。

つまりこれでまで北周にはじまる、とされてきた道教像の定型化は、少なくとも既に西魏において出現していたことを明らかにした。なお、陝西を中心に数多く現存する北魏の道教像あるいは仏道併存像では、管見の限り凭几を伴う例を見出すことはできなった。このことから凭几を表す道教像は、河東において生み出された蓋然性が高いと結論付けた。

次に凭几を表す道教像の出現の契機について考察を進めた。凭几を表す像は道教像以外にも存在し、それは維摩像である。中国南北朝時代において、維摩はもっぱら独尊で表されることはなく文殊菩薩との問答する場面として。維摩・文殊が一対で造形化されている。こうした維摩像のうち凭几を伴う現存最古例は、北魏（6 世紀前半）の河南・龍門石窟古陽洞にみられる。しかし凭几の出現当初は凭几の使用方法を正しく反映した図像ではなく、三脚の凭几なのか二脚の肘掛けなのか曖昧な表現であった。その後、年代が下がるにつれ次第に明確に凭几とわかり、さらには本来の使用方法に倣った図像へと変化していく過程を明らかとした。こうした凭几を伴う維摩像は洛陽の所在する河南そして山西を中心に流行し四川にも伝えられたが、しかしながら西安を擁する陝西ではあまり採用されなかった表現であった。

このうち興味深いのが、山西である。高廟山石窟は山西東南部のいわゆる晋東南の高平に所在し、1 石窟及び 6 小龕が現存しており、このうち石窟の造営年代は北魏末～東魏頃と考えられている。本窟のプランは方形で正壁に如来三尊像を配している。そして左右側壁はそれぞれ正壁寄りに菩薩立像があり、壁面中央の上半部に一龕を設けている。正壁主尊像からみて左側壁の屋形龕には「維磨大士」の題記が付されている。つまり龕内の主尊は維摩像であり、マント状の衣を羽織り正面向きで牀座に坐り、膝前に太い天板の凭几が表され、右手に麈尾を執り左手を凭几に添えている。一方で右側壁龕は「文殊像」の題記があり、帳形龕内に正面向きで牀座に坐り拱手する如来形像が表されている。このように高廟山石窟は、維摩・文殊像が同一平面上ではなく、左右壁にあって対面する形式の極めて稀な配置である。通常、維摩・文殊像は図様に揺らぎがあったとしても、同一の平面に左右一対で配置されることから尊格を特定することができた。しかしながら向かい合う別々の壁面に維摩・文殊像が表され、さらには文殊像が菩薩形でないとなると題記がなければ尊格を知ることは容易ではない。維摩・文殊という組み合せ図像が、山西の辺境地において変化した様相をここに確認することができる。

また高平にほど近い、同じく山西東南部の沁県では、北部の南涅水から北魏～宋時代にかけての 1000 件近くにものぼる膨大な石刻仏像群が出土している。その大部分が、石材をブ

ロック状に成形しその四面に尊像を彫出した四面像を高く積み重ねたいわゆる四面塔で、その制作年代は北魏末が最も多く東魏・北斉頃までと考えられている。そうした四面像のなかに次のような興味深い像が含まれている。①四面像　維摩像龕（山西・南涅水石刻館）は、四面のうち一面に大きく屋形龕を設けており、龕内には左手に麈尾を執る維摩らしき人物が大衣を羽織り斜めを向いて牀座に腰掛けている。右手は欠損するが、左肘下と右足脇さらに右脚脇に計三つの小さな破損箇所があり、おそらくは凭几が立体的に形作られていたと推測される。横を向くポーズではあるものの、他の面には相対する文殊像に該当する尊像は表されず、問答の場面が成立しえない構成となっている。また沁県・南涅水出土のもう一つの②四面像　維摩像龕（山西博物院）は、四面のうち三面にはそれぞれ如来三尊像が表されているが、残る一面のみやや異質な図様となっている。本面は大きな屋形龕を設け、龕内に顎鬚を蓄え開口し、大きな衣を羽織り正面を向いて牀座に坐る老相の人物が表されており、その腹前には風化が進むもののT字形の細い凸部が確認でき、凭几を表していると考えられる。この正面向き人物像から想起されるのは先述した高廟山石窟における正面を向いた維摩像であり、銘文はないものの維摩像として彫出された蓋然性が高い。

このように山西では高平・高廟山石窟において、それまで同一の平面に一対で表されていた維摩・文殊像が石窟左右側壁に向かい合って配され、さらに沁県・南涅水出土の四面像では維摩像のみが単独で表されるなど、維摩・文殊像の組み合わせが崩れたり、正面向きのすがたで表されることにより尊格比定が容易ではなくなる現象が生じていた。

現時点では例示できる像の数が少数にとどまるが、山西における図像的にやや崩れた維摩像が、同じく山西の河東における道教像の制作に際し引用され、凭几を伴う道教像が成立するにいたったと結論付けられる。また、その後も河東においては、西魏・北周に引き続き隋・唐時代においても、四面像そして単独像共に道教像の主尊は凭几を伴うことが通例となったことを確認した。

（2）黄河渡船場としての河東

さらに、河東の最西南に位置し黄河有数の渡船場であった芮城と、その対岸である陝西省潼関の唐時代における仏像・道教像に注目し、その影響関係について考察した。

芮城から出土した唐時代の比較的早期(7 世紀)における在銘の道教三尊像に次の二例がある。両像共に、芮城の漢渡郷(現、風陵渡鎮)候峰村から出土したものである。①唐・儀鳳元年(676)銘　道教三尊像(山西・芮城県博物館)の主尊は高さのある冠を被り長い顎鬚を蓄え、左手は凭几に添え右手に麈尾を執って坐り、台座正面には衣が垂下するいわゆる懸裳を表すが、その形状が左右不均衡なのが特徴といえる。そして左右の脇侍は共に両手先を見せ拱手し直立するが、右脇像がやや大きい。そして②唐・儀鳳 3 年(678)銘　道教三尊像(山西・芮城県博物館)の主尊は小ぶりな冠を被り、左手を腹前の凭几に添え右手に麈尾を執って坐り、台座正面の懸裳には同心円状の衣文表現がみられる。左右の脇侍は主尊と同様の面貌で、両手先を隠して拱手し直立する。

ここに示した二つの道教三尊像は法量がほぼ同様であり、主尊の腹前に凭几が置かれ左手をこれに添え右手に麈尾を執るといった基本的な特徴が共通している。しかしながら制作年にわずか三年の違いしかないにもかかわらず、衣文の表現をはじめとして同一地点から出土したとは思えないほど異なる要素が多い。このように芮城において同時期に造られながらも異なる作風そして異なる石質の像が併存していたことがわかる。

そのなかで興味深い像が出土しているのが潼関である。潼関は山西そして河南との省境に

位置し、中原と関中を繋ぐ重要な関塞として度々歴史の表舞台に立ってきた。1963 年、潼関県太要鎮老虎城村に所在する古代の窯址から、隋～唐時代の石造および陶製の仏像 13 件が出土した。石質はいずれも砂岩で、如来三尊像は三軀ありいずれも紀年銘を有し、潼関における様式の変遷を探ることができる貴重な像である。その一つ唐・上元 3 年(676)銘　如来三尊像(陝西・西安碑林博物館)は、主尊は宣字形台座に結跏趺坐するが頭部をやや左に傾げており、左手を膝にのせ右手は胸前に掲げる。台座正面に垂下する懸裳は左右不均衡で中央が三角形を呈し尖っており、像向かって左寄りが切っ先のような形状を特徴とする。左右の脇侍は蓮華座に立ち、共に外側の手を下げ水瓶を執り内側の手を胸前にするポーズをとるが、右脇像がやや高い位置にある。本像にみられる、懸裳が左右不均衡で向かって左寄りが切っ先のような形状は、同時に出土した三軀の独尊如来坐像と共通する特徴である。

本像は先に示した芮城出土の②唐・儀鳳元年銘道教三尊像とわずか三ヶ月違いで造られたものである。両像は主尊が天尊と如来とでまったく異なるのは言うまでもないが、台座正面における左右アンバランスな懸裳の表現や、脇侍像が左右対称とはならず右脇像が大きい点など、多くの共通点を有している。また砂岩という石質も一致しており、両像は同一地域において造られたと考えられるだろう。さらに踏み込めば、両像には制作者のクセのような特徴も近似していることから、同一の工房における制作をも想起させる。

本像をはじめとして、山西・河東の西南端に所在し黄河の渡船場であった芮城とその対岸である陝西・潼関における、唐時代の仏像･道教像のうち小型三尊像について検討した。そのなかで、芮城から出土する像には同地における年代的展開では理解し得ない像が含まれていることを指摘し、それらが潼関から出土する像と近似することを具体的に示した。

つまり、潼関で造られた像が芮城へと運ばれていた蓋然性が高いことを明らかにした。芮城では、当地で造られた像と潼関から運ばれたと考えられる像が同一地点より出土しており、芮城において制作地の異なる像が共に信仰の対象として祀られていたことを示唆している。また潼関で造られた仏像と潼関から芮城へ運ばれた道教像は、制作にあたった石匠のクセといった感のある細かな特徴が似通っており、潼関において仏像と道教像が分け隔てなく同一工房で造られていた可能性が高いと思われる。なお現時点において潼関では道教像は出土していないが、芮城在住者が潼関の工房に道教像の制作を依頼したのか、あるいは潼関在住者の道教徒がなんらかの理由で芮城に運んだかなどの問題は現存数が少なく不詳である。

興味深いのは、潼関で造られ芮城にもたらされた言わば越境する仏像・道教像は、芮城の仏像･道教像の作風に大きな影響を与えたとは認められないことである。言うまでもなく、仏像･道教像の制作者による地域を越えた交流がもたらす像の様式的影響関係と、その受容者たる仏教徒や道教徒による像の移動とはまったく次元が異なる事象であるが、おそらくここで取り上げた潼関から芮城へ運ばれた三尊像は後者にあたるのであろう。少なくとも唐時代における芮城と潼関では、黄河の渡船場として密接な関係にあったものの、造像活動においては相互の影響関係はなかったことを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 齋藤龍一	４．巻 6
２．論文標題 中国南北朝時代における維摩像の展開と地域性―道教像との図像的関連に注目して―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仏教芸術	６．最初と最後の頁 9-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 齋藤龍一
２．発表標題 唐時代における石造仏教・道教像の地域性　－黄河を挟む山西･ゼイ城と陝西･潼関－
３．学会等名 日本中国考古学会2020年度大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤龍一
２．発表標題 仏像と道教像の図像的関係性再考:南北朝－唐時代
３．学会等名 国際ワークショップ「中国三教と日本神道の「見える」ものや「見えない」もの」
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 李松著、土屋昌明・齋藤龍一　監訳、廣瀬直記・熊坂聡美・因幡聡美　訳	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 552
３．書名 中国道教美術史　漢魏晋南北朝篇	

１．著者名 編集　齋藤龍一	４．発行年 2019年
２．出版社 大阪市立美術館、読売新聞社・NHK大阪放送局・NHKプラネット近畿	５．総ページ数 202
３．書名 『仏像　中国･日本』展覧会図録	

１．著者名 齋藤龍一	４．発行年 2024年
２．出版社 法蔵館	５．総ページ数 294
３．書名 中国道教像研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関